

センター試験の 分析と対応

高崎朋彦

東京学芸大学附属高等学校

I 2008年度センター試験の分析と対応 [筆記]

1. 全体的な傾向

難易度の点では昨年度から大幅な変化はなく、また形式の点に於いても、第5問を除いて昨年度を踏襲した形となっている。一方で題材が対話文から説明文、エッセイから論説文へと変化しており、一時のコミュニケーション重視傾向から、読解力重視傾向への変化が見られる。また使用語数も昨年度から200語以上増加しており、決められた時間内に多くの英文を読む訓練が必要となる。

イラストの説明として正しいものを選ぶ形式や、リスニング方式の導入から考えると、インプットされる情報が文字によるものだけではないため、自分で表現し、推測するなどして、与えられた選択肢と比較検証する必要がある。

従って、マークシート方式ながら、正解を導き出す過程で、受験生には自己表現力や推理力、包括的な読解力が求められており、知識だけを多く持っていたとしても、それを活用する力が不足していると、なかなか得点に結びつかない。

2. 具体的内容分析

<第1問>

形式はやや変化したが、難易度は平易で配点も昨年度並み。

A 発音 (6点：解答数3)

カタカナ発音だと紛らわしいものもある。普段から日本語に無い微妙な音も意識しておくといよい。母音、子音ともに、綴りが同じでも発音が異なるものは多くある。発音の区別を身につけるにはやはり、数多く読む経験を積むことが大切である。

B アクセント (4点：解答数2)

昨年度までの4つの単語から強勢音節の位置が異なるものを1つ選ぶ形式から変わり、やや易化した。3音節、4音節と長いものもあるが、-ateで終わる動詞は後ろから3つ目の音節が強勢となるなど、法則を伴うものもあるので、日常から意識して発音すると気付きやすい。

C 発話の強勢の意図 (9点：解答数3)

昨年度から登場した、話者の意図を読みとる問題。それぞれ、副詞や目的語などが強調されており、それらと対応する語句をキーワードとして解答している選択肢を選び出す必要がある。

<第2問>

昨年度と同じ10問で、動詞の用法を問う問題が約半数という点も同じ。難易度も標準的。

A 文法・語法 (20点：解答数10)

文法・語法を問うものであるが、半分は動詞関連の出題で、やはり言語の運用能力の鍵となる品詞の役割の習得は必須である。問1ではaudienceの規模を説明する形容詞を問われており、特定の名詞を修飾する形容詞を整理しておく必要がある。類題としてpopulationやpriceなど、形容詞を間違えやすい名詞を確認しておくといよい。問2のtake the risk of ~、問3の無生物主語+say(s)、問4のobserve a rule、問7のinclude taxは、文法というよりは、主語や目的語との関連を問うコロケーションについての出題である。単に熟語として覚えるのではなく、英語的な表現として自分でも使えるようになっているとセンスが磨かれてくるものである。その他の問いも、関係詞、仮定法、口語表現、態

に関わるもので、これまでも頻出の文法事項であり、習得しておく必要がある。

B 対話文完成 (12点：解答数3)

対話の流れから当てはめべき選択肢を見つけるためには、前後の表現を正確に理解する必要がある。口語表現の中でも、驚きや怒りなど、極端な心理状況を表す表現には、ある程度決まったかたちのももあり、文法の知識だけでは正解にたどり着かない場合もある。また電話での対話では、自分のことを三人称で表す場合もあるなど、独特の表現もあるため、あらゆるものを教材として、英語の運用能力を高めることが求められる。

C 語句整序 (12点：解答数6)

問1のit seems ~ that ...、問2のlet you know ~、問3のsomething go wrongと、いずれもある程度決まった英語の表現を完成させるものである。ヒントとなる日本語はないが、問題文の文体は口語調であり、日常会話でよく耳にする表現を問うている。

<第3問>

下線部や途中の設問までの流れをよく読み、細かい意味よりも大意をつかむことが必要。

A 意味類推 (8点：解答数2)

昨年度からの新形式であるが、下線部自体は、知らなければ正解に到達しにくいものが多い。従って、下線部までの流れをヒントとし、場面を頭に浮かべながら本文をよく読むこと。問1では選挙での投票の分かれ目となる懸案事項が話題の中心となっている。また文字通りに下線部を解釈した場合に、手に余り、扱いに困りそうなイメージも伝わってくる。以上のようなことから選択肢を絞るとよい。問2では下線部の直前にan area where they do not have permission、直後にand the consequences might not be goodとあるため、無許可→違法=悪い結果という流れが見えてくる。普段からすぐに辞書を引かずに、前後から判断する訓練をしておくこと、この形式の問題はもちろん、難しい語彙の多い長文などにも応用できるはずである。

B 意見要約 (18点：解答数3)

三者三様の意見を述べたものであるが、いずれも、英語のパラグラフによく見られるパーティ

カル・トライアングル(逆三角形)構造をしている。結論を明確にする傾向の強い英語のパラグラフでは、主題をパラグラフの先頭に置くことが多く、今回の問題では、There needs to be some limitation to ~、Students should be free to chose ~、there should be some kind of dress codeとあり、ここだけでそれぞれの立場は判別できる。さらに、今回のトピックとして、最初の文にwhether there should be a mandatory dress codeとあるため、shouldやneedを用いた文に話者の意見が含まれているという推論もたてられる。先の3文に加え、一人目は最終文にA dress code should be made、二人目は最終文にTeachers should trust us、三人目は全体的にshould、should notを用いているので、いずれも何を主張し、何に反対をしているのかを整理しやすい。

C 文補充 (18点：解答数3)

空所前後の文の流れを正確に把握する力と、ある程度の語彙力が必要な設問である。文章の流れを決める最大のヒントはディスコース・マーカー(標識語)である。例えば最初の空欄33では、直前にandがあるため、They loved the rainforestと並列される表現が当てはまる。一方で、直後のHoweverが逆接であることから、mining companies and cattle ranchers started destroyingと反対の表現が入ることも分かる。また、特に中心となっている人物や、場面の描写に関する語など、語彙が多いことは当然のことながら、英文全体の印象を構成するのに役立つ。

<第4問>

昨年度から導入された図表やポスターを読みとるもので、計算や情報整理が要求される。昨年度よりも使用語彙数が増加したものの、数字を中心とした情報の整理を問うものが多く、冷静に対処すればそれほどあわてる必要はない。

A 図表問題 (18点：解答数3)

図表に示されている以外に、本文の中にも衛星に関する情報が記されているため、図表に書き加えながら本文を読み進めるとよい。打ち上げの日時や運転期間といった観点の他、アメリカの援助を受けた時期など、図表には現れていない情報もあるため、下線を引いたりメモを付記

するなどして分かりやすく工夫するとよい。

B 広告問題 (18点：解答数3)

数字に関する情報が中心であるため、場合によっては問2のように計算を要する設問もあり得る。日常生活において珍しくない設定のポスターであるが、細かい情報にも気を付け、求められている条件に該当する数値や日付等を導く。

<第5問>

昨年度までの対話形式の問題から、イラストの説明となっている文章を選ぶ形式に変化。いずれの形式も英文は比較的平易である上、イラストに関する説明を選択すればよく、解答しやすい。第5問の使用語数は昨年度から半減。

ビジュアル問題 (18点：解答数3)

今年度新規導入問題。それぞれの選択肢の違いを読みとればよい。Aはイラストが1つで選択肢が4つであるため、英文を読み比べる必要があるが、Bはイラストが4つで英文は1つであるため、本文を読みながら、内容と一致しないイラストを消しながら正解を絞り込む。イラストも英文も4つあるCは、4コマ漫画になっているので、イラストで流れを把握し、矛盾した内容の選択肢を除外していくのがよい。

<第6問>

問題文がエッセイから説明文に変化し、段落の内容を問う問題など、新傾向の設問が登場した。

長文読解 (42点：解答数7)

昨年度までは本文全体を通して一致するものをいくつか選択させる問題など、全体的な理解を問うものが出題されていたが、今年度は題材が説明文に変更されたこともあり、段落ごとの要旨や論点の推移の把握を確認する設問に大幅に変化している。問1～問3ではそれぞれの段落で述べられている内容の理解を問うもので、本文の表現と選択肢での表現が異なるものの、内容として一致するかを問う運用能力、表現力を問われていることになる。例えば、問1では、段落最後の the dramatic change in the way information is perceived and used を、選択肢では deal with information entirely differently と表現している。また問5に見られるような、段落ごとの内容の推移やまとまりの理解を問う設問には、それぞれの段落で用いられているディスコー

ス・マーカーによって対処できる。第3段落に用いられている One に対して、第4段落で Another example とあるため、この2つの段落で例を述べていることが判断でき、第5段落にも For example とある一方で、第6段落に A similar example が登場することから、この2つの段落でもあることについての例示がなされていることが分かる。従って (3) と (4)、(5) と (6) がまとまっているグループが正しいと判断できる。

3. 昨年度と変化のあった点

- ① 第1問Bの単語の強勢を問う問題形式が変化
難易度は昨年度並みであるが、微妙な母音や間違いやすい強勢問題も出題されている。
- ② 第5問が対話形式からイラスト説明文に変化
昨年度までは2題だった第5問が3題となり、配点も6点少なくなった。
- ③ 第6問の題材がエッセイから論説文に変化
総語数も1割程度増え、全体的な理解を測るものから、論理の流れや全体の構成の理解を測るものへ変化し、読解力重視傾向が見られる。

4. 日頃の学習で大切なこと

- ① 英語を声に出す
声に出して読むことによって、意味のまとまりを自然に意識できるようになり、英語のまま理解する訓練となる。小説などの場合には、場面描写や登場人物の描写など、論説文の場合には、主題文と支持文などが一定のルールで書かれていることも意識できるはずである。
- ② 体系的に語彙を増やす
入試というものに臨むにあたって語彙が豊かであるに越したことはない。しかし、やみくもに覚えるのではなく、コロケーションや派生語といった、単語と単語のつながりを意識して、帰納的に核にあるイメージを体得してほしい。
- ③ インプットしたものをアウトプットする
読んだり聞いたものを、紙に書いたり口に出すことによって、英語を定着させる訓練をしてほしい。言語は本来、伝達のための道具の一つである。自分から発信する訓練を重ねることで、体系的な知識や、言葉には表れない本質を意識できるようになるはずである。

II 2008年度センター試験の分析と対応 [リスニング]

1. 全体的な傾向

出題数、配点等は昨年度と同じだったが、総語数がやや増加した。読まれるスピードは昨年度までとほぼ同じであるが、後半のやや長めの問題文では若干速くなっている。

出題形式として、イラストから判断するもの、計算を要するもの、対話等の全体の流れからことばに表れていない情報を特定するなど、聞く能力のみならず、情報を整理し、論理的な分析をする能力も問われている。

2. 具体的内容分析

<第1問>

短い対話から情報を読み取り、正しい選択肢を選ぶ問題。紛らわしい情報や、意味が分からないと全体に影響する単語もみられた。

短い対話 (12点：解答数6)

各対話の発話は全て4、24～32語でほぼ均等。

判断のキーとなる語を正確に聞き取り、選択肢をしぼる。特に、bill (問4)、capital letter (問6)にみられるようなキーワードが正解を決定づける場合もあるので、正確な力が必要である。

<第2問>

日常にみられる場面を題材にした設問であるが、問題文を聞くまで、選択肢をしぼれないため、場面を想像できるようにしておく必要がある。

後に続く応答 (14点：解答数7)

各対話での発話は2～3、14～25語と幅あり。

keep an eye on ～ (問8)、Could I help you ～ ? (問10)、I mean it (問12)、be lost (問13) など、日常生活にみられる口語表現を使いこなせるよう、さまざまな場面の英語に触れておくとよい。

<第3問>

短い対話から話し手の意図を汲みとる他、写真と対話の英文から人物を特定するなど、論理的な思考力が求められる。

A 話者の意図 (6点：解答数3)

各対話での発話は3～6、50語前後で均等。

本文で述べられているのと違う表現や、本文に

述べられている表現から、話し手がどのように判断しているのかを推理する必要があり、論理的な思考力が問われる。

B 写真の説明 (6点：解答数3)

発話は9と減少したものの、語数は微増。

最初の人物Kathyを正確に特定しないと、他の人物の特定に影響する。また、それぞれを差別化する情報(服の模様、帽子やカメラの有無)にも注意し、選択肢をしぼっていく。

<第4問>

ラジオ放送やCM、館内放送、もらったお土産についてのモノログ形式の設問。述べられている情報を正確に把握する力が必要である。

A モノログ (6点：解答数3)

語数は100語弱と2割増加、スピードも速い。

特定の場面での独特の口調や表現に注意し、情報を整理して正解を導き出す必要がある。

B モノログ (6点：解答数3)

語数は200語を越えやや増、速度はほぼ同じ。

選択肢の表現の中には、本文で述べられているものと類似したものがあるため、正確に聞き取り、誤りの選択肢に惑わされないよう注意する必要がある。

3. 対応のポイント

① あらゆるものを練習の素材とする。

日常の対話、ラジオ放送、館内放送と、さまざまな場面設定が素材となっている。教科書以外にも、自分の生活範囲での英語のアナウンスなどにも注意してみよう。

② 自分で表現する訓練をする。

自分で書いたり話せるものは聞き取ることも出来る。身の回りのものや、自分自身のことを書き、読んでみると、実際の問題で何がポイントとなるのかも実感できるはず。

